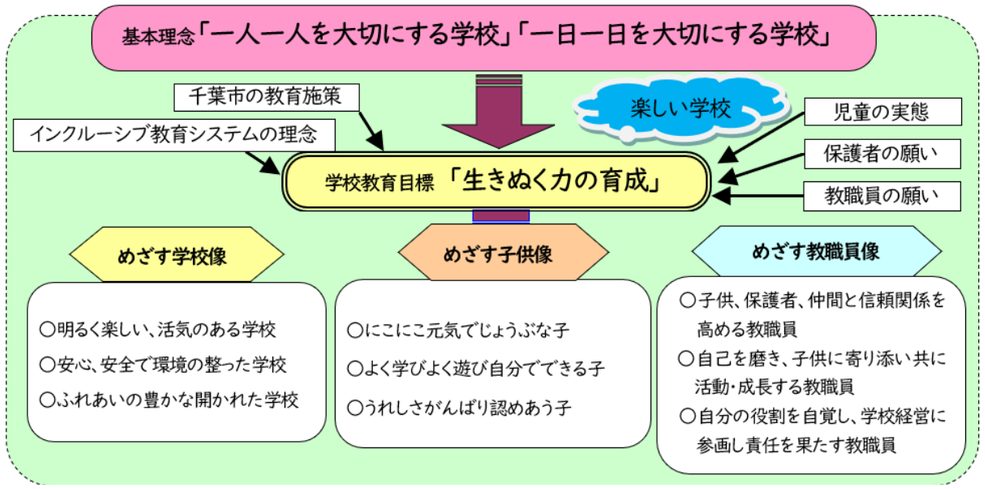
令和７年度　千葉市立第二養護学校

研究紀要



研究主題

知的障害教育における個に応じた自立活動の授業づくり

―実態に即したグループ編成と専門性を生かした授業づくり―

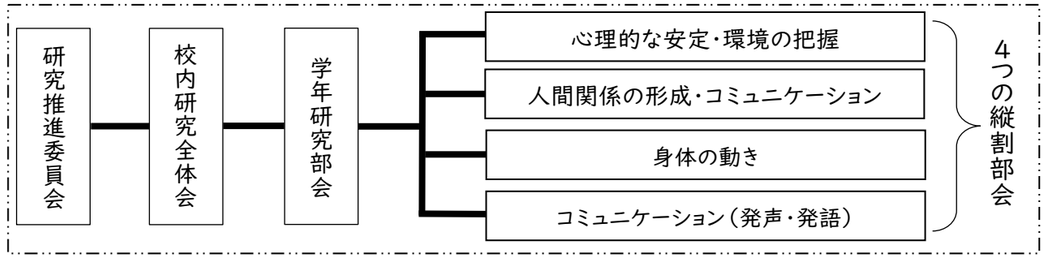
＜主題設定の理由＞

本校では「知的障害教育における個に応じた自立活動の授業づくり」を研究主題に設定し、今年度で２年目を迎える。自立活動の教育課程上の位置づけを明確にしたことで、自立活動の学びを深めたいという要望が多く寄せられたことから本主題を設定した。１年目は副主題を「実態把握からの課題設定と個に応じた指導を目指した授業改善」とし、目標設定シートや授業づくりシートを活用することで、事例児の課題を明確にして、目標や課題に応じた授業を構築することができた。一方で、事例児の目標のみに焦点が当たり、グループの他の児童の目標を意識することができなかった点が課題として挙げられた。

この課題を踏まえ、今年度は副主題を「実態に即したグループ編成と専門性を生かした授業づくり」とした。全校児童を対象にチェックシートを用いた実態把握を行い、個々の目標を意識した効果的な指導が行えるグループ編成と授業づくりを目指した。さらに、類似性のある課題に取り組むグループで学年を越えた縦割部会を構成し、授業検討には、各分野に特化した外部講師を招聘した。指導助言を受けながら指導や支援の方法、授業などについて検討することで、特別支援学校としての専門性を生かした授業を展開し、より効果的な支援へとつなげていきたいと考えた。

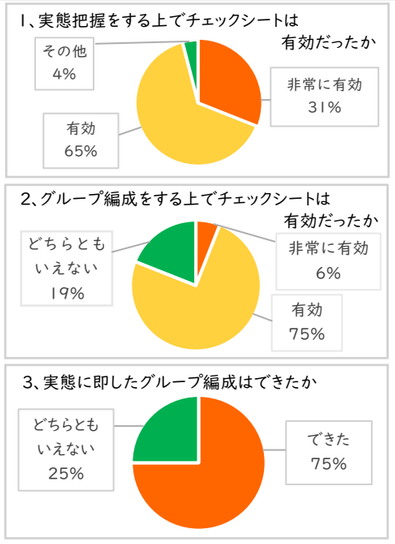
＜研究体制＞

研究組織は下図のとおりである。研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究部３名で構成した。部会は、学年ごとの学年研究部会と似た課題に取り組むグループの指導を行う教師からなる縦割部会で構成した。



＜研究の成果と課題＞

自立活動における実態に即したグループ編成について



【図3】教職員向け　事後アンケートより

成　果

・研究部が提案した自立活動に係る４種類の共通授業があったことで、年度初めでも実態把握がしやすかった。

・チェックシートを活用したことで、客観的に実態を把握することができ、実態に即したグループ編成を行うことができた。【図３－１】

・全児童を対象にチェックシートを活用したことで、グループ内の児童全員の課題や目標を意識して授業を行うことができた。【図３－２】

課　題

・チェックシートついて、内容が十分でないところや表現がわかりにくい項目があったため、内容の精査と見直しが必要である。

・目標別にグループ編成をした後、指導する中で児童の実態やねらいが変化することがあるため、グループの再編成やグループを流動的に変更する機会を設ける必要があった。【図３－３】

専門性を生かした授業づくりについて

成　果

・縦割部会では、類似性のある課題に取り組む教師同士で支援・指導法を話す機会が増えたことで、新たな方法を見つけたり、これまでの実践をより深めたりすることができた。

・講師を招聘した検討会では、映像を用いて児童の実態や授業の様子を講師と共に視聴したことで、具体的な助言を得ることができ、不明点についても率直に質問できる機会となり、実践に活かすことができた。

課　題

・講師の先生方が児童の授業の様子を参観する時間や、授業検討における十分な協議時間を確保できなかった。研究計画における時間設定に工夫が必要であった。

＜おわりに＞

研究２年目となり、昨年度の自立活動の土台となる基礎的・基本的な知識の確認と習得から、今年度は、より実践力を高める研究を行った。自立活動チェックシートをブラッシュアップし、より活用しやすいものにすることで児童の実態把握がより具体的になった。そして、全児童にチェックシートを活用したことで本校児童の課題も明確化し、そこから４つの領域についての学年を越えた縦割り部会を編成することで、生活年齢や特性に対する支援の方策について共有することができた。今年度の研究に際し、安川晴信先生、島尾秀美先生、渡邉美穂先生、島森邦夫先生には、何度も本校に足をお運びいただき、たくさんのご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。

校長　渡邊　幸也

千葉市立第二養護学校

〒263-0021　千葉市稲毛区轟町 3-6-25

TEL 043-256-1950　FAX 043-284-4986

千葉市立第二養護学校 ホームページ

https://www.city.chiba.jp/school/jhs/you2/index.html

本校ホームページでは、研究過程で活用や作成をした各種資料を公開しています。

＜ホーム→学校生活→校内研究＞

○自立活動チェックシート
○目標設定シート（記入例）
○授業づくりシート
○活動・教材集

＜研究の方法＞

①自立活動の実態把握

・本校独自の自立活動チェックシートを活用し、全校児童の実態把握を行った。

・チェックシートの全項目を学級担任が記入できるよう、研究部が提案した自立活動に係る実態把握のため4種類の共通授業を各学級で実施した。

②実態に即したグループ編成

・学年部会にて、児童のチェックシートを基に、取り組む課題や目標を明確にした。

・自立活動の時間における指導で取り組む課題や目標に応じて、各学年の下記のグループに編成を行った。

①心理的な安定・環境の把握
②人間関係の形成・コミュニケーション
③身体の動き
④コミュニケーション（発声・発語）

③目標設定シートと授業づくりシート

・教師間で簡潔に実態と授業内容が共有できるよう、グループごとに本校独自のシートを使って、共通理解を図った。（全 22 グループ）

・流れ図を基に作成した目標設定シートは、児童の将来像を明確にするため、今年度から「3年後の目指す姿」の項目を追加した。【図1】

・授業づくりシートは、昨年度の課題を踏まえ、事例児に着目する項目（目標や手立てなど）とグループ全体の動きに関する項目を整理した。

④縦割部会の実施

・取り組む課題や目標に応じて編成した4つのグループについて、1年生から6年生までの教師を縦割りで配置し、それぞれの担当する教師による縦割部会を構成した。

・課題や目標に応じた専門的な指導支援を深めるため、各部会に外部講師を招聘し、専門的な助言を受けるとともに、授業検討を行った。（年間2回）

⑤活動・教材集の作成【図2】

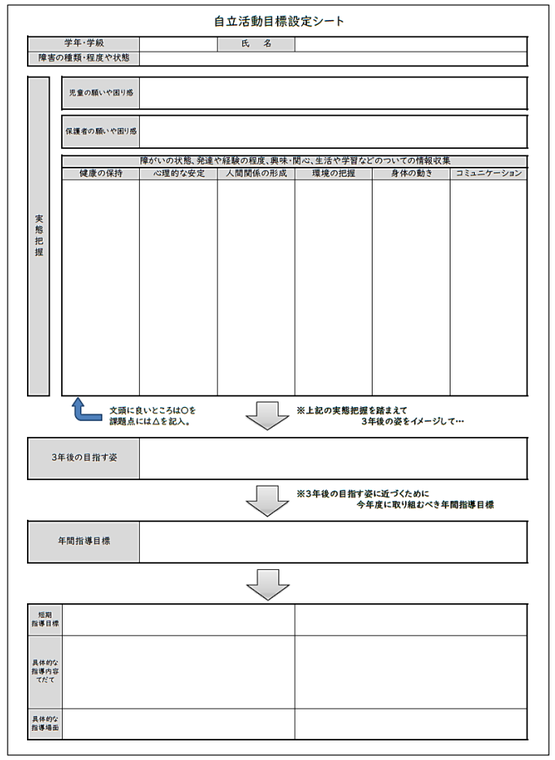
・校内で実施した全 22 グループそれぞれの授業で、指導支援の専門性に着目した活動や教材を共有するため、活動・教材集を作成した。

⑥今年度の成果と反省と次年度の研究について

・縦割部会で協議した成果と反省を校内研究全体会で共有した。

・今年度の成果と反省を基に、次年度の研究についての方向性を定めた。

【図1】 目標設定シート



【図2】 活動・教材集

自立活動　活動・教材集				
活動名	楽しく身体を動かそう！			
主とする指導の区分	健康の保持		環境の把握	
	心理的な安定		身体の動き	○
	人間関係の形成		コミュニケーション	
ねらい	・膝を曲げて物を拾うことができる。 ・不安定な場所でも姿勢を保持して歩くことができる。			
教材の使い方				教材等の写真添付
○カード拾い ・床に広げたカードをしゃがんで拾い、かごにカードを入れる。 ※かごの高さ…児童が手を伸ばしてカードを入れられる高さ。 使用した教材 ・児童が好きなものやキャラクターの写真をA5サイズにしてダンボールに付けたカード ○箱運び ・椅子に座った状態で、２リットルペットボトルに水を入れたものを拾って、机に置く。 使用した素材 ・児童が好きな食べ物のイラストを貼り付けた、水入りのペットボトル。 ○バランスビーム ・クッション性のあるバランスビームに足形のイラストを付けて、足の向きを意識して歩く。				
指導（支援）にあたっての工夫や視点・留意事項				
・上記の３つ以外にもいろいろな身体の動かし方ができるような教材を用意して、サーキット運動に繰り返し取り組んだ。 ・膝を曲げてしゃがむことができるように、背中側から腰を垂直に下せるように支援した。 ・つま先が真っすぐ向くように足形を置いて、必要に応じて足元や手を支える支援を行った。				

【身体の動きグループ】

講師：千葉県立桜が丘特別支援学校　自立活動部　島森　邦夫　先生

1．身体の動きの専門性に関する指導

体幹の弱さや股関節・膝関節の使い方、筋緊張、尖足歩行などに課題のある児童への支援では、個々の特性に応じた分析が不可欠である。目的は運動量の増加ではなく、「自分の身体を上手に動かす方法を学ぶ」ことにある。例えば、身体の軸を安定させる活動や、椅子からの立ち座り・しゃがむ動作を通じて正しい関節の使い方を体感させることが重要である。また、ストレッチや重さのある物を運ぶ課題を取り入れ、柔軟性と筋力をバランスよく育成することが推奨される。そのためには、活動中に「お腹に力を入れて」というような言葉かけを行い、身体操作と認知的理解を結びつけることが効果的である。

2．指導実践における留意点と工夫に関する指導

教師は、児童の主体性を尊重し、最小限の支援で「自分で動く場面」を意図的に設定することが重要である。 課題に応じた安全な環境設定や、発達段階に応じた段階的な指導も不可欠である。児童が「できた」という成功体験を積み重ねることで、自信と意欲を育むことができる。指導では、動きの質を観察し、適切な言葉かけや支援を行うことで、児童の学びや自信を深めることにつながる。

3．具体的な支援法・活動に関する指導についての助言

①階段昇降での支援法

支援する際には腰より下で手をつなぐことで、バランスを取る感覚を養えるようにする。この方法により、児童が主体的に体重を移動させる練習となり、体幹の安定を促すことができる。

②重心移動を意識する活動

椅子からの立ち座りや、座った状態で床の箱を持ち上げる動作を通して、前傾姿勢と股関節の曲げ伸ばしを意識できるようにする。お尻から膝側へ重心を移動して立ち上がることで、正しい重心移動を体感できるようにする。

【コミュニケーション（発声・発語）グループ】

講師：千葉市立松ケ丘小学校　ことばの教室　渡邉　美穂　先生

1．発声・発語の専門性に関する指導

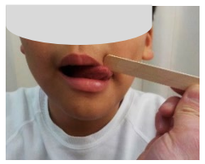
発声・発語の指導には、児童の発達段階に加え、口の形、舌や唇の動き、息のコントロールなど、口腔機能の理解と児童の実態把握が不可欠である。「噛む」「舐める」「吹く」「うがい」といった基本的な口の動きは発声・発語の基盤となるため、日常生活の中での様子を丁寧に観察し、多角的に実態を把握しておくことが重要である。また、言葉が不明瞭な児童の中には聞こえに困難さを抱える場合があり、見落とされやすいため注意が必要である。

2．指導実践における留意点と工夫に関する指導

発声するための指導・支援は訓練的要素が多い。そのため、常に楽しい雰囲気づくりや授業の中で思わず声を出したくなるような場面を設定することが大切である。また、指導場面では児童が一生懸命発声して伝えようとしていることをしっかりと受け止め、言い直しをさせないことが重要である。

3．具体的な支援法・活動に関する指導についての助言

＜発声を促す専門的な道具＞



①舌圧子

舌を動かす位置をイメージしたり、修正したりすることをねらいとする。

②鼻息鏡（びそくきょう）

鼻の下に当て、息を吹きかける。鏡が曇る範囲で鼻の通気度や息漏れを測定する道具。

＜研究の流れと内容＞

回	時期	内容	体制
1	4月	今年度の研究の方向性について	全体会
2	5月	自立活動チェックシートを基にグループ編成	学年部会
3		目標設定シートの検討	学年部会
4	6月	部会顔合わせ、事例児紹介、講師招聘に向けて疑問点の整理	縦割部会
5	7月	講師を招聘しての指導・支援法検討	縦割部会
6		講師講話『子どもたちの幸せを考える～自分らしく暮らす力（生きる力）を身につける～』	全体会
7	9月	目標設定シートと授業づくりシートの検討①	学年部会
8		目標設定シートと授業づくりシートの検討②	縦割部会
9	10 月	講師を招聘しての目標設定シートと授業づくりシートの検討	縦割部会
10	11 月	活動・教材集の作成	学年部会
11	12 月	講師講話『専門性を生かした「自立活動」の授業づくり』	全体会
12	1月	授業参観と実践の振り返り	縦割部会
13		今年度の成果と反省	全体会
14	3月	研究紀要の完成と次年度の研究について	全体会

＜講師招聘による講話（一部抜粋）＞

7月と12月に講師を招聘し、研究全体会を行った。7月には発語や発声に係る指導観、12月には今年度の研究を踏まえた教師の専門性をテーマとした。

【夏季全体研修～講師講話～】 講師：千葉市立松ケ丘小学校 ことばの教室 渡邉 美穂 先生

演題：『子どもたちの幸せを考える ～自分らしく暮らす力（生きる力）を身につける～』

（1）自分らしく暮らす力（生きる力）を身につけるために

困難に直面した際もしなやかな思考力で対処し、課題に取り組める力であるレジリエンスの視点と、自分自身の困り感から生じる課題に気付き、向き合いながら克服に向けて取り組んでいく当事者研究の視点を子ども自身がもてるようにすることが大切である。この2つの視点を育てていくために重要となるのは、教師と児童の「対話」である。

（2）子どもたちの言葉を育てていくための「対話」

言葉を育てるためには、過ごす空間が「話せないことを話せる場」であり、教師が「話したいと思える相手」であることが重要である。そのため、対話の際には教師が子どもの主訴や思いを勝手に決めつけてはならない。実態把握では、発せられる言葉だけでなく、表情やしぐさにも着目し、本人が何に困り、どうなりたいのかを丁寧にくみ取る必要がある。また、対話をするときには、子どもと対等に関わり、子ども自身が見いだした課題の克服に向けて同行するという姿勢が求められる。教師は、教えるという立場でありながらも、子ども自身の考える機会を奪わないよう、偏見や思い込みを排除した姿勢で向き合う場面があることを心得ておく必要がある。

【冬季全体研修より～講師講話～】講師：千葉市養護教育センター 学校訪問相談員 安川 晴信 先生

演題：『専門性を生かした「自立活動」の授業づくり』

（1）教師の専門性

教師の専門性とは、特別な技術や知識を示すことではなく、子ども一人一人の違いを理解し、向き合う姿勢にある。障害特性や家庭環境、興味関心等の幅広い実態を把握する中で、子どもの良いところを見つけ、「できない」という評価ではなく「〇〇すれば◇◇できる」という視点で関わることが重要である。これらの姿勢と視点をもち、子どもの自立を目指して日々関わる教師こそが、専門性を備えた教師である。

（2）目標設定と評価

目標設定では、これまでの学習状況（過去）を把握し、数年後の姿（未来）を想定したうえで、今取り組むべき課題（現在）を明確にすることが重要である。また、小学部では将来の自立につながる多様な経験を積む「ボトムアップ」の視点、高等部では卒業後の生活を見据えた具体的で絞り込んだ目標を設定する「トップダウン」の視点が必要である。評価では、自立活動が学習の土台と発達の基盤を育てることを踏まえ、学校生活だけではなく、家庭生活を通してどのような変容が見られたかを総合的に把握し、評価することが大切である。

＜講師招聘による縦割部会での講話からのご助言（一部抜粋）＞

７月と10月には各縦割部会に外部講師を招聘し、授業検討や協議を通して専門的な助言を受けた。

【心理的な安定・環境の把握グループ】

講師：千葉市養護教育センター　学校訪問相談員　安川　晴信　先生

1．心理的な安定・環境の把握の専門性に関する指導

指導にあたっては、児童の行動の背景を捉えた実態把握を行っていくことが重要である。朝の活動が安定しない児童については、生活リズムや睡眠が十分に確保されているか、朝食がきちんと摂れているかなど、生活面の背景を丁寧に把握する必要がある。生活リズムの乱れは心理的な不安定につながることもあるため、その影響を踏まえた支援が求められる。また、不適切行動についても、その背景要因を適切に理解することが欠かせない。表出方法が限られていることや余剰時間が多いことが不適切行動を誘発する場合があるため、専用のイラストカードを用いたコミュニケーション手段の確立や、好きな活動を取り入れることが、不適切行動の軽減につながる。一例ではあるが、行動の背景を的確に捉えていくことが指導を行うための第一歩となる。

2．指導実践における留意点と工夫に関する指導

児童自身が学習の中で活動の選択や決定を行うことが重要であり、主体的で意欲的な学習につながっていく。また、児童が意欲的に取り組む活動には「好きなもの」や「得意なもの」が含まれている可能性が高い。児童の「やりたい」という気持ちを尊重し、その思いを実現できる環境を整えることが、教師の重要な役割である。

3．助言を踏まえた指導の実際

＜好きなものを見つけて、興味・関心の幅を広げる活動＞

マットの上に様々な感触のビーズや粘土を敷いて歩くサーキット運動に取り組んだ。活動を進めていく中で、やることがわかり、好きなものができて意欲的に活動する様子が多く見られた。

【人間関係の形成・コミュニケーショングループ】

講師：千葉市立宮野木小学校　特別支援教育エリアコーディネーター　島尾　秀美　先生

1．人間関係の形成・コミュニケーションの専門性に関する指導

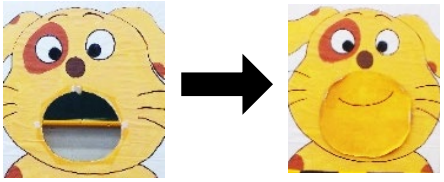
児童の実態に応じた目標設定が重要であり、活動のねらいは一つに絞って明確化する必要がある。「協力」は高度な目標であるため、まずは自分のことを自分で行う力を育てる段階的な指導が求められる。また、丁寧な言葉遣いを日常的に意識することが、将来の社会的な関わりの基盤となる。さらに、児童には成功体験を積ませることで生活の中で自然に生じる課題を乗り越える経験を支援することや、年齢や発達段階に応じた活動設定及び、将来の社会参加を見据えた指導の視点が重要である。

2．指導実践における留意点と工夫に関する指導

授業づくりにおいては、活動内容と環境設定の両面から工夫する必要がある。活動内容の検討にあたっては、偶然性の高いゲームは努力と結果が結びつかず、目的によっては教材として適さないことがある。また、教材が複数の能力を必要とする場合には、負荷の調整が求められることを念頭に置くとよい。環境設定の検討にあたっては、動線の整理や、教師が児童と同じ目線で関わる姿勢が安心感につながる。視覚支援の提示方法については、順番を示す際には縦並びが理解しやすいことや、活動の終わりが一目で見てわかることなど、具体的な工夫が必要である。さらに、児童自身が「できた」と感じられる時間を保障した上で評価することが、自己肯定感の育成に有効である。

3．具体的な支援法・活動に関する指導についての助言

①見通しがもてる活動



口の中に食べ物の模型を入れたら、にこやかな口形で口元を覆い、終わりがわかるようにする。

②市販のボードゲームやカードゲームを使用した活動

ボードゲームやカードゲームは、思い通りにならない状況や、友達と協力しなければならない場面を自然に体験できる教材である。学齢に合わせた教材を使用すると、交流学習や将来の余暇活動に生かすことができる。